

2018年11月14日

伊方原発運転差止広島裁判 第13回口頭弁論期日

意見陳述

東京都八王子市在住
八王子平和・原爆資料館共同代表
原告・上田 紘治

本日は意見陳述の機会を与您いただき感謝申し上げます。

私は広島で被爆し、現在、東京都八王子市で、20年以上続く八王子平和・原爆資料館の共同代表として係わっています。今日は貴重な機会を頂きましたので、その立場で意見陳述をさせていただきます。

八王子平和・原爆資料館は日本でも珍しい資料館です。原爆に係わる2000冊以上の書籍をそろえ、我々の手で自主運営していますが、女優の吉永小百合さんも会員のお一人です。

さて、私は広島に原爆が投下された時、3歳6カ月で記憶はありません。原爆が投下された時は、爆心地から約10km離れた可部町に住んでいました。本籍地は現在も変わらず広島市平和公園内、爆心地から400m、当時の町名で元柳町、今は中島町です。母が私の手を引き、妹を背負い入市した2号被爆者です。我が家の被爆者は当時、26歳の母、私、2歳の妹3人です。

原爆は想像を絶する猛烈な熱線と爆風、放射能の3つが特徴です。放射能は、73年以上経過した現在でも、その影響から被爆者は逃れることはできません。他の兵器には見られない非人道的兵器です。直爆とあわせて目・鼻・口や皮膚から入ってくる放射能は体内でDNAを傷つけ、あらゆる細胞活動の働きを低下させ、壊します。DNAは遺伝子ですから、子や孫への影響も否定できません。子や孫が生まれる時、人知れず心痛めるのが被爆者です。被爆者であることから、好きな相手との結婚を断念した人、幸いに結婚しても子どもを持つことをあきらめた人、又、結婚しても被爆者であることへの理解が得られず離婚した人など数多く見てきました。

1982年、私が40歳の時、第2回国連軍縮特別総会に東京都武蔵野市で地域代表として参加したことが、私の人生の大きな転換点でした。以来、一貫して平和運動に携わって参りました。母や多くの先達たちから、被爆の実相を聞き、言葉で言い表すことのできないこの世の地獄は、2度と繰り返してはならないと強く思っています。私は2013年10月まで、東京都の原爆被爆者団体である東友会事務局次長の役目を担ってきました。被爆者団体の全国組織である、日本原水爆被害者団体協議会は、結成以来63年目になりますが、一貫して「再び被爆者をつくるな」と訴え続けていると共に、原発の再稼働にも反対しています。

私は現役時代に、仕事で福島第一原子力発電所に係わってきました。業界では福島第一原子力発電所のことを「1F」と呼びますが、2011年3月、残念ですが「1F」で重大な事故が起こりました。当時、安全装置は七重にあり、七重目はシラウドと言って建屋全体を覆い被せたものですが、安全神話に、とっぴり浸かっていました。しかし、信じていた七重ある安全装置も何の役も果たず、安全神話が偽りであったことを実証しました。

広島・長崎の原爆者に続き、広範囲の地域に住む人々が放射線の被曝者になる・・・この事は「再び被爆者をつくるな」と訴え続けた被爆者にとって耐えられない事です。先祖代々続いた土地を離れ、生業を一瞬にして奪われ、決して元の住家に帰ることはできない方々のことを思った時、このようなことがあっていいのか！安全神話を許した我々の責任も否定しませんが、真に、この責任は原発行政を推進した国と電力事業者にあり、金銭では決してつぐえない出来事です。

今は「7つの安全装置」ではなく「5重の壁」というそうです。しかしそれも沸騰水型原子炉の話で、伊方原発が採用している加圧水型原子炉は、原子炉建屋がありませんから、「4重の壁」と指摘されています。

私は、核物質を人類が利用することに大いなる疑問を持っています。人類が到達した科学技術のレベルは、核物質を安全に運営・管理する水準に達していないと思います。高レベル放射性廃棄物は地中深く数百mガラス固化にして、10万年単位で保管するそうですが、世界で唯一フィンランドに地層処分する場所があります。10万年後に生きている人類が、今の言葉を理解できるかど

うかが議論となっているそうです。そこまでして核物質を利用する必要性がどこにあるのでしょうか。

被爆者は73年間余、放射性物質、放射能が人類とは決して共存できないことを、身を以て体験しています。電力を得るにはボイラーで蒸気をつくりタービンを回転させ発電機で電力を得る単純な構造です。原発はボイラーの過熱手段の一つでしかありません。自然界には発電手段として、太陽光、風力、地熱、豊富な水力など多くの選択肢があります。それらを活用しないで、なぜ、後世に危険とわかっている原発に固執するのでしょうか。電力は現代の社会生活にはなくてはならない公的なもの、社会共有の財産です。電力事業者は原子力村と言われるような、一部の企業の利益優先ではなく、なによりも地域社会・市民生活の安全が第一義的でなければいけないと思います。

今夏、被爆者として106日間、地球を一周し、寄港する各国で核兵器禁止条約の批准と核兵器の無い平和な世界をと訴えて回る機会がありました。航海中の船から、又、陸に上がりハイウエーを走る車窓からですが、デンマークでは海の広い範囲に風力発電が広がり、米国でも広大な荒野に風力発電が延々と続く様子を目にしました。1Fの過酷事故からいち早く教訓を引き出したドイツでは、期限を切って原発からの脱却政策をすすめる、米国でも自然エネルギー革命が進行中で風力・太陽光発電の比重が拡大しています。世界の流れは限りなく自然エネルギーを活用していることを、実感しました。

広島は私の故郷です。定年退職後、広島に戻る予定でしたが、東友会の役員となったため、そのまま東京で暮らしています。兄弟、親族、幼馴染が住み、生まれ育った故郷での原発再稼働には全面的に同意できません。被爆地広島から、もっとも近い四国電力伊方原発の再稼働には大きな違和感を覚えます。裁判の原告にと話を持ちかけられた時には、一も二もなく原告となりました。被爆地広島から原発反対の声をあげていくことの意義の大きさにも共鳴しました。

私は望んで被爆者になったのではありません。当時の世論が戦争反対と多数であったならば、被爆者は生まれませんでした。原発事故被害者も同じで、自ら好んで原発事故被害・放射能被害を望む人はいません。今、生きる私たちが、原発反対の声を上げ、そして原発を断念すれば、チェルノブイリ事故や福島原発事故で生まれたような放射能被曝者は回避できました。

今後は絶対に原発事故を起さない、環境には大量の放射能を放出させないなどの保証は不可能です。前の原子力規制委員会の委員長、田中俊一氏は、「原子力規制委員会は、規制基準に合致しているかどうかを審査しているのであって、審査に合格した原発が安全だなどとはもうしません」と再三再四明言されています。安全な原発は絶対にありません。日本には自然エネルギーが多様であり、原発はこれ以上推進すべきではありません。好んで被爆者になったわけではない私たちと同様、好んで原発被曝者を求めている人たちを数多く生み出すこととなります。私たちに、これから未来ある人たちの幸せの選択肢を奪う権利はありません。

原発を推進する人たちの中には、科学技術に完璧なものはない、事故やトラブルを起こしながらそれを克服して、科学技術は発展していく、原発も同じことだ、と主張する人もいます。しかし、これは地球そのもの、人類そのもの、生きとし生きるものに対して、根本的に危険である放射能災害の特殊性を無視し、航空機事故や列車事故などと同列視する議論だと指摘します。一旦、事故が起きれば取り返しのつかない放射能災害ですが、それでも原発を再稼働する意義はどこにあるのでしょうか。原発を推進する人たちは是非この根本的な問いに答えて頂きたいと思います。

以上述べました問いに答えないまま伊方原発3号機を再稼働しようとするならば、貴（本）裁判所は是非、再稼働を禁止して頂くよう心よりお願い申し上げます。今、日本においてそれができるのは司法の場、裁判所だけです。

ご清聴ありがとうございました。